

吉山北側、鹿角盆地東側山塊では情報はまだ得られていない。

現時点でまとめてみると、まず、昭和から明治に遡ってこれまでに得られた生息情報（狩猟情報を含む）を単純に重ね合わせていくと、ほとんどの地域で分布範囲が拡大する傾向が見られ、分布が面になる場所がかなりでてくる。明治以降、急激に分布域の縮小があり、それが現在まで至っていることは間違いなさそうである。一方、今後の調査によるが、秋田県森吉山北部～鹿角盆地東側山塊～青森県三戸郡山地帯～岩手県北部七時雨山塊及び北上山地北半分にかけての連続する広い地域ではなかなか情報が増えてこない。今後の課題である。なお、平野部ではほとんど情報はなく、また、猿害情報とサルが増えたという情報は下北半島西部にあるのみで、現代に至ってもほとんど減少と消滅の情報であった。

霊長目の乳歯咬合と永久歯咬合への推移過程

—ヒトとチンパンジーの dP^4 と dP_4 の形態の比較—

今村基尊・安立妙子（愛知学院大学・歯）

ヒトの乳歯列では、 dP^4 の遠心面と dP_4 の遠心面の近遠心的位置関係（以下 T.P. と略す）は、垂直型になっている。したがって $M^1 M_1$ が萌出してもその咬合関係は安定せず、混合歯列期末期になって $M^1 M_1$ の咬合関係が安定する。哺乳綱の動物の一般的な乳歯列の T.P. は、近心型（ dP^4 の遠心面より dP_4 の遠心面が近心にずれた状態）になっており、 $M^1 M_1$ が萌出すると直ちにその咬合関係は安定し機能を営むと考えられる。

ヒトの T.P. が垂直型である要因について検討するため、ヒトとチンパンジー（T.P. は近心型）の dP^4 と dP_4 の形態を比較した。観察に用いたのは、京都大学霊長類研究所所蔵のチンパンジー（*Pan troglodytes*）幼体の dry skull 8 頭の dP^4 16 歯、 dP_4 15 歯、愛知学院大学歯学部小児歯科学教室所蔵のヒト小児の石膏模型 17 人の dP^4 34 歯、 dP_4 34 歯であり、以下の結果を得た。

- 1) dP^4 の歯冠近遠心径における talon の近遠心径の割合は、チンパンジーで 0.47、ヒトで 0.42 であり、チンパンジーの talon の割合の方が大きかった（ $P < 0.01$ ）。
- 2) dP_4 の歯冠近遠心径における talonid の近遠

心径の割合は、チンパンジーで 0.71、ヒトで 0.76 であり、ヒトの talonid の割合の方が大きかった（ $P < 0.01$ ）。

- 3) dP^4 と dP_4 の歯冠近遠心径の割合は、 dP^4 を 1 とした場合、チンパンジーもヒトも 1.10 で同じであった。

- 4) dP^4 の歯冠長幅指数は、チンパンジーは 108.45、ヒトは 110.57 であり有意差はなかった。 dP_4 では、チンパンジーは 80.89、ヒトは 87.25 であり、ヒトの方が大きかった（ $P < 0.01$ ）。

以上の結果より、ヒトの乳歯列の T.P. が垂直型になっているのは、ヒトの dP の近遠心径における talon の割合がチンパンジーより小さく、かつヒトの dP_4 の talonid の割合が大きくなっていることが、要因の一つと考えられた。さらに、ヒトの dP_4 の talonid は、近遠心的のみでなく、頬舌的にも大きくなり、面積が広がっていると考えられた。

オナガザル亜科の胃粘膜の組織学的研究・ニホンザルの消化能力 2

鈴木一憲（福島県医大）

坂口 英（岡山大・農）

ニホンザルは昆虫から樹皮まで幅広いものを食べる雑食性であるが、詳細な生態学的調査結果から草食性が強いことが知られている。しかしながら、植物体の繊維の分解・吸収（消化）に対する量的評価はなされていない。これまでの我々の研究では、消化管内容物が大腸に長時間滞留することから、ニホンザルの大腸は微生物の繊維消化にとって有利な機能を持つ可能性が示唆された。本研究ではこの点を解明することを目的として、飼料消化率や消化管内容物滞留時間を実測することによって、消化生理学的検討を行った。

- 1) 繊維成分（ADF）の消化率は低繊維飼料（5.6%）で 66.5%、高繊維飼料（18.0%）で 27.2%（いずれも 2 頭の平均）であった。この値からニホンザルは高い飼料繊維消化能力を持ち、高繊維飼料にも適応できる消化管機能が備わっていることがうかがえる。高繊維飼料の繊維源の主体はアルファルファであるが、今回得られた結果は、他の小型の草食性単胃動物のアルファルファ繊維消化率と比較すると高い方に属する。